

2020年度 学生満足度調査 結果報告（全体）

2021年3月

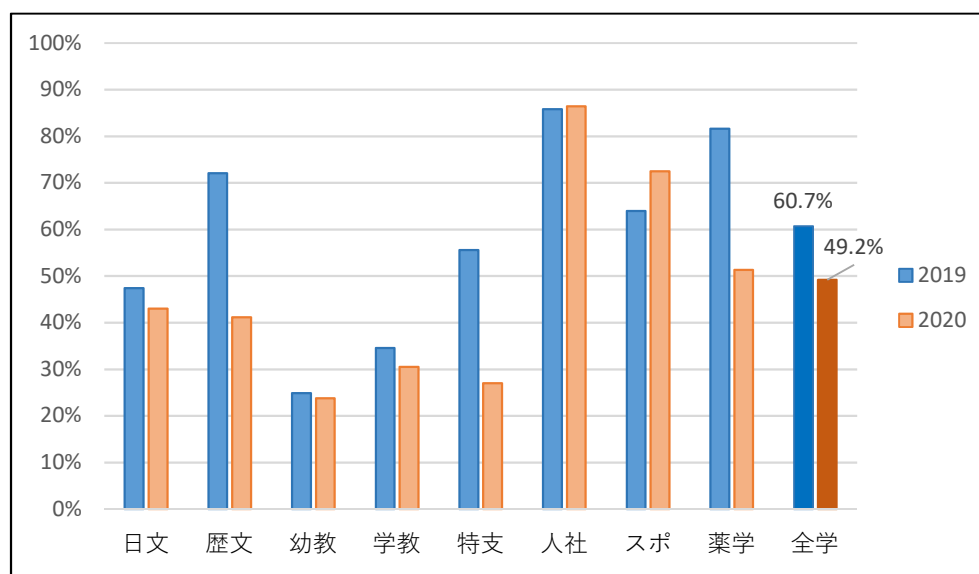
IR委員会

【調査結果の概要】 満足度調査の実施は今年度が2年目である。一昨年度からは、調査方法を moodle 上に設定、昨年度から調査・フィードバック用の moodle2 サーバーに移設した。そのため、令和元年以前のデータと比較することは困難となった。一方、各問でその選択肢を選んだ理由を自由記述で記入する欄を多く設定した。このことで、不満や困り感の詳細が具体的に浮かび上がるといった効果も現れてきた。今後は、本年度の調査を基本に、大学への満足度を的確に把握することができるように、調査を改良していきたい。

[1. 基本的分析]

2020年度データ回収状況(期間:11月9日~12月4日)

	対象者数 (人)	回答者数 (人)	2020 回答率 (%)	2019 回答率 (%)	2018 回答率 (%)
日本語日本文学科	228	98	43.0	47.4	70.6
歴史文化学科	211	87	41.2	72.1	71.1
幼児教育専攻	463	110	23.8	24.9	44.4
学校教育専攻	348	106	30.5	34.6	58.7
特別支援教育専攻	137	37	27.0	55.6	48.5
人間社会学科	338	292	86.4	85.8	86.3
スポーツ健康学科	433	314	72.5	64.0	74.9
薬学科	825	423	51.3	81.6	72.6
合計	2983	1467	49.2	60.7	67.0



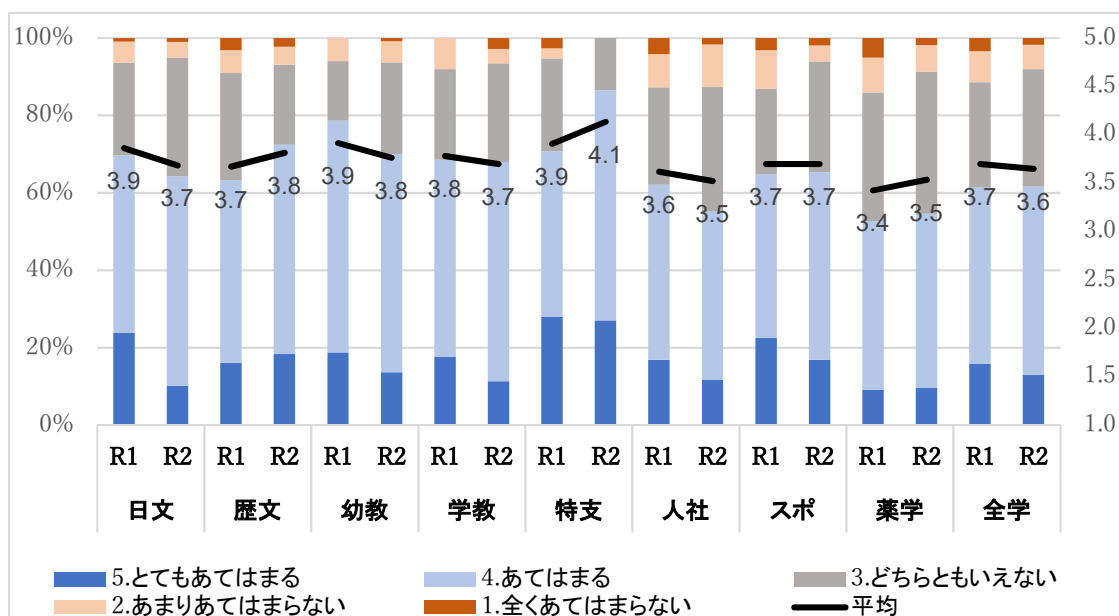
＜考察＞全学の回答率は、昨年度に比べかなり低くなった。一方で、学科(専攻)間の回答率に大きな差が出た。特に、人間社会学科(以下“人社”)とスポーツ健康学科(以下“スポ”)では、他学科が回答率を大きく減らす中、それぞれ0.6, 8.5ポイント上昇した。IR委員から、回答率向上のための取り組みとして、以下のような工夫が紹介された。「回答率については、ゼミ単位で学生の回答状況をお知らせしている。その際には、学生の氏名も公開している。」つまり、未回答者を特定し、ゼミ担任から個人別に回答を督促する、それを調査期間中に何度か実施することが、全体の回答率向上に貢献しているということである。未回答者の氏名を公開する際には配慮が求められるが、誰が未回答者であるのかをゼミ担任が知って、個別に声掛けすることが学生の行動変容に大きく貢献していると考えられる。今日のICT環境下では、Webにアクセスした際に表示される情報は、利用履歴などの個別情報を反映したものであることが一般化しており、個人的に「〇〇さんは、満足度調査に未回答なので直ちに回答してください」といった督促情報の発信方法(プッシュによる発信も含め)と、最も信頼しているゼミ担任から声掛けすることが、今後の回答率改善のキーであると思われる。何よりも、人社とスポのIR委員、ゼミ教員の回答率向上への熱意がこの数値につながっていることは間違いなく、他の調査における督促取り組みモデルとしたい。

以下の集計では、「総合的満足度を尋ねる」設問の場合は、学科間の比較をし易いように全学科・専攻のデータを並列に並べた。一方、「満足度の内訳を尋ねる」設問の場合は、観点による違いを比較するために、全学を合計して設問毎に並べた。

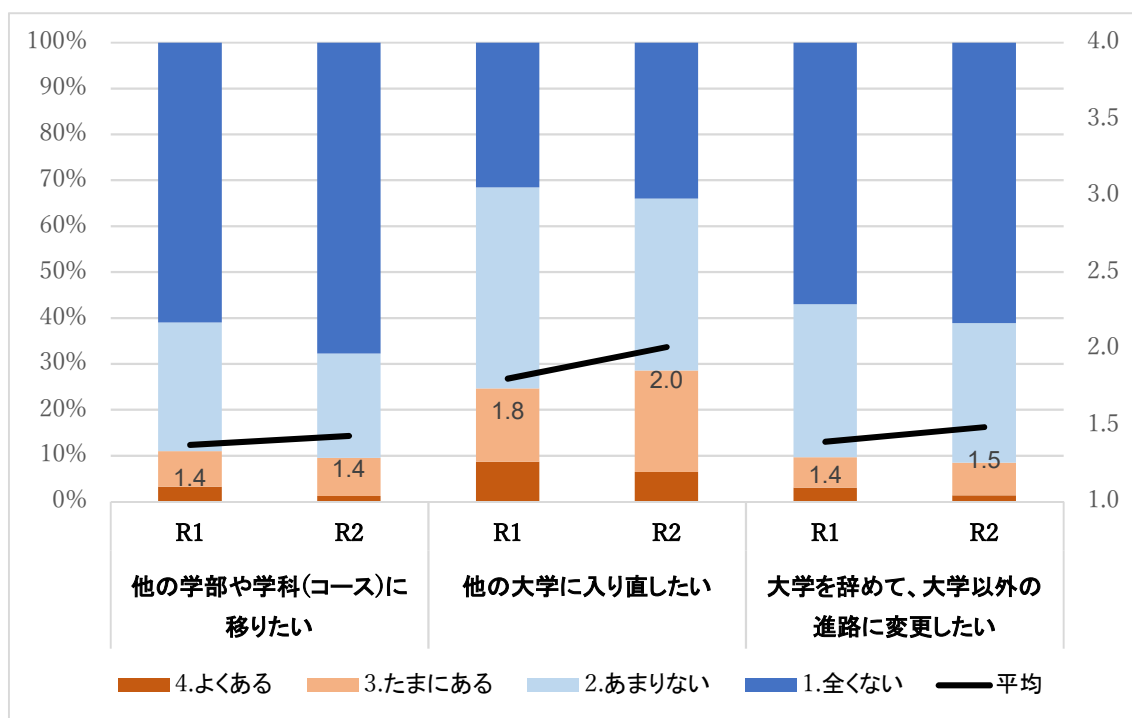
なお、満足度に関する設問の考察では、選択肢のうち「とても満足している」と「満足している」を併せて「満足群」、「あまり満足していない」と「全く満足していない」を併せて「不満足群」と呼んでいる。

【I:本学への満足度】

本学に入学してよかった(総合的内容)



設問別集計(全学)



(※)上記の質問に「よくある」あるいは「たまにある」を選択した者には、主な理由について自由記述にて回答を求めた。自由記述は別紙参照。

「本学に入学してよかった」という問に対する満足群の割合は R1:61.3%、R2:61.6%であり、変化していない。一方、本年度の新入生アンケートにおける、「大阪大谷大学に入学して満足してい

ますか」との問いでは、満足群は 60.1%であり、昨年度比-16.2%、一昨年度比-15.2%であった。不満足群は昨年度比+2.8%、一昨年度比+0.9%で、全体として不満足群が微増、満足群が大きく減少、どちらとも言えない(普通)が大きく増加した。これは新型コロナウイルス感染症拡大防止対策(以下“コロナ対策”)のため入学してからほとんど登学できなかったという、例年とは大きく異なる状況の中で、満足とは言えないと判断した新入生が増加した他、多くの新入生が満足・不満足判断ができなかった結果と考えられる。

次に、満足度調査を学年別に集計した結果を下記表に示す(注 在籍学年データは未取得なので、入学年度を学年とみなして集計した)。

	1回生	2回生	3回生	4回生	5回生	6回生
1.とてもあてはまる	13.6%	9.4%	14.1%	19.0%	8.1%	3.7%
2.あてはまる	50.1%	51.7%	48.6%	45.1%	45.9%	46.7%
3.どちらともいえない	29.9%	30.3%	27.6%	29.8%	36.5%	37.4%
4.あまりあてはまらない	5.7%	6.7%	6.6%	5.4%	6.8%	8.4%
5.全くあてはまらない	0.7%	1.9%	3.1%	0.7%	2.7%	3.7%

1回生から4回生までに着目すると「3.どちらともいえない」「4.あまりあてはまらない」「5.全くあてはまらない」は大きな違いが見られない。一方、「1.とてもあてはまる」が増加傾向にあり、「2.あてはまる」は徐々に減っている。2回生の「1.とてもあてはまる」の値が他学年と比べて明らかに低いのは、コロナ禍が影響していると思われるが、詳しい分析は別稿に譲る。

さらに1回生について、新入生アンケートと学生満足度調査を比較すると

新入生アンケート		学生満足度調査	
1.満足している	24.4%	1.とてもあてはまる	13.6%
2.やや満足している	35.7%	2.あてはまる	50.1%
3.どちらとも言えない	34.0%	3.どちらともいえない	29.9%
4.あまり満足していない	4.3%	4.あまりあてはまらない	5.7%

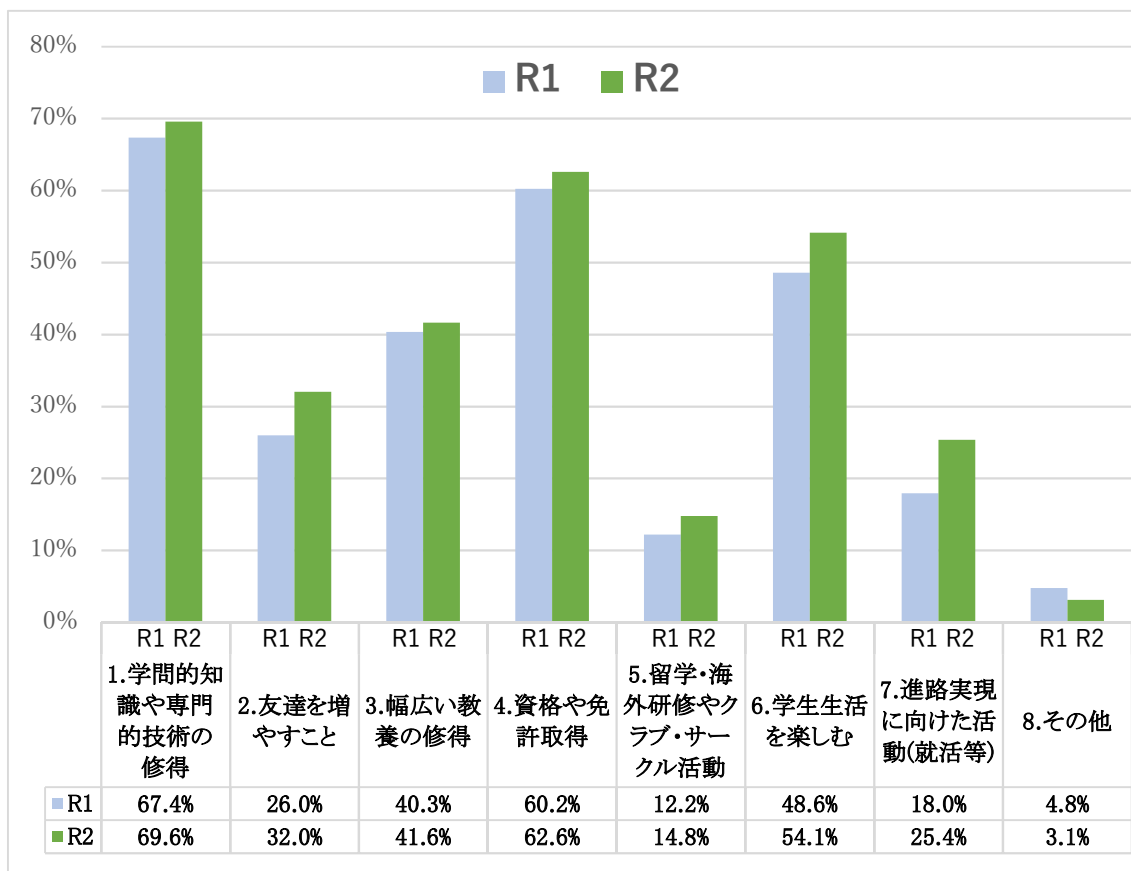
5.満足していない	1.6%	5.全くあてはまらない	0.7%
-----------	------	-------------	------

新入学時点で「1.満足している」と回答した学生が、学生満足度調査で「2.あてはまる」に評価を下げたことが窺える。また、新入生アンケートで 652 名であった回答者数が、学生満足度調査では 405 名 (-38.9%) に減った。未回答者と評価を下げた回答者についての分析が必要である。

昨年度の報告書で、「学年別の集計により学年進行に伴って低減すると言えるのかを検証すること」を提案した。上記のように、1 回生に着目すると、新入生アンケート時点での“期待を込めたプラス評価”が、学生満足度調査ではかなり現実的な評価に移っていることが確認された。今後は、新入生アンケートと学生満足度調査を学生に紐づけて、満足度が大きく下がる学生に対する低下要因の調査・フィードバックを検討したい。

設問別集計の比較では、退学、転学科へのニーズに年度間の違いは見られないが、転学希望がやや増加していることが読み取れる。

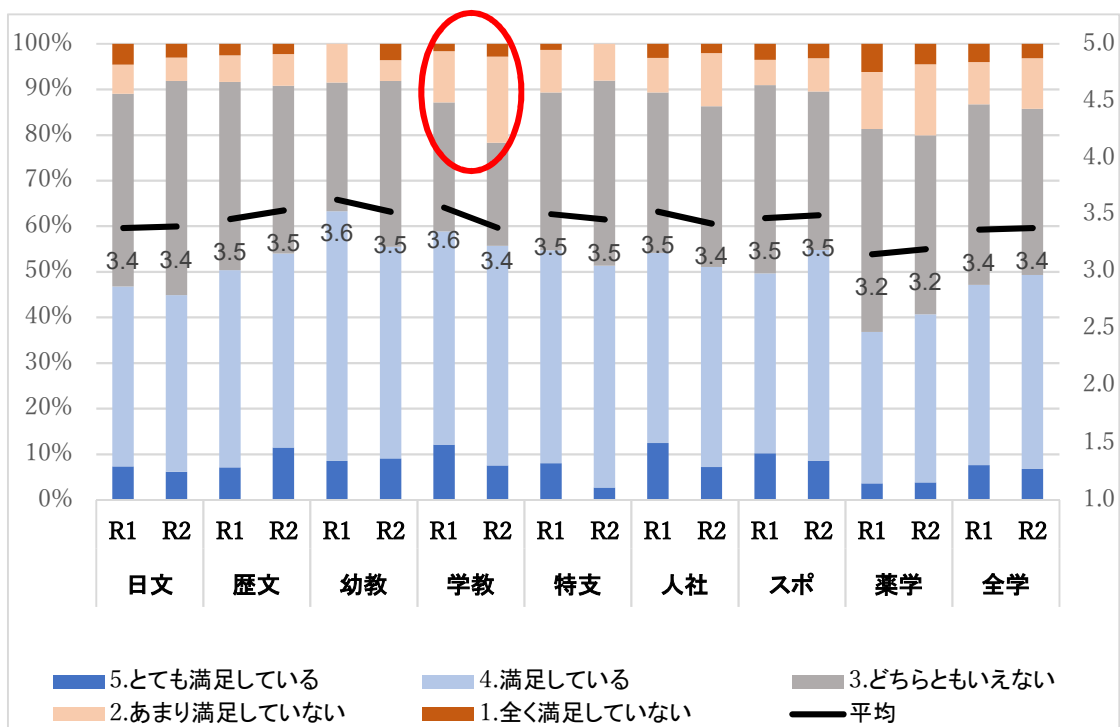
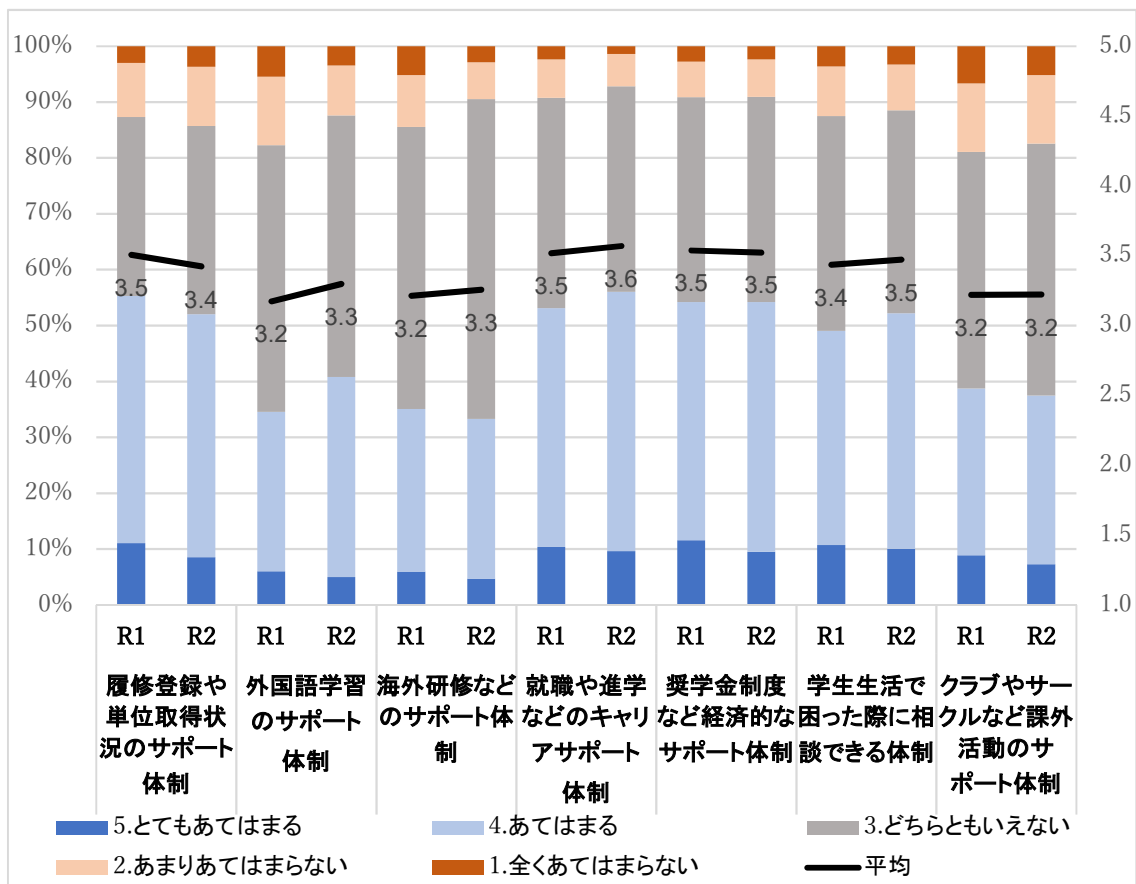
【Ⅱ：大学での生活で力をいれている事柄】



「1.学問的知識や専門的技術を身につけること」と「4.資格や免許取得」に関心が高いのは本学の特徴である。この問いとともに、「日々の生活時間の何%を1～8の選択肢にあてているか」といった質問をすることで、学習への関心・意欲が明確になるのではないだろうか。例えば、「6.学生生活を楽しむこと」にどれくらいの時間を充てているのかを聞けば、大学生としての学習時間を短くしていることにつながっているのではないかが判るであろう。また、それを個人別に把握できれば、個別学修支援にも貢献できる。また、今年度は、コロナ禍によって学生間コミュニケーションの機会が減ったため、「2.友達を増やすこと」「6.学生生活を楽しむこと」に関心が集まったと思われる。同時に、「7.進路実現に向けた活動(就活等)」が大きく増加したのも、コロナ禍で就職活動が影響を受けたためだと考えられる。

【Ⅲ：大学生生活のサポート体制への満足度】

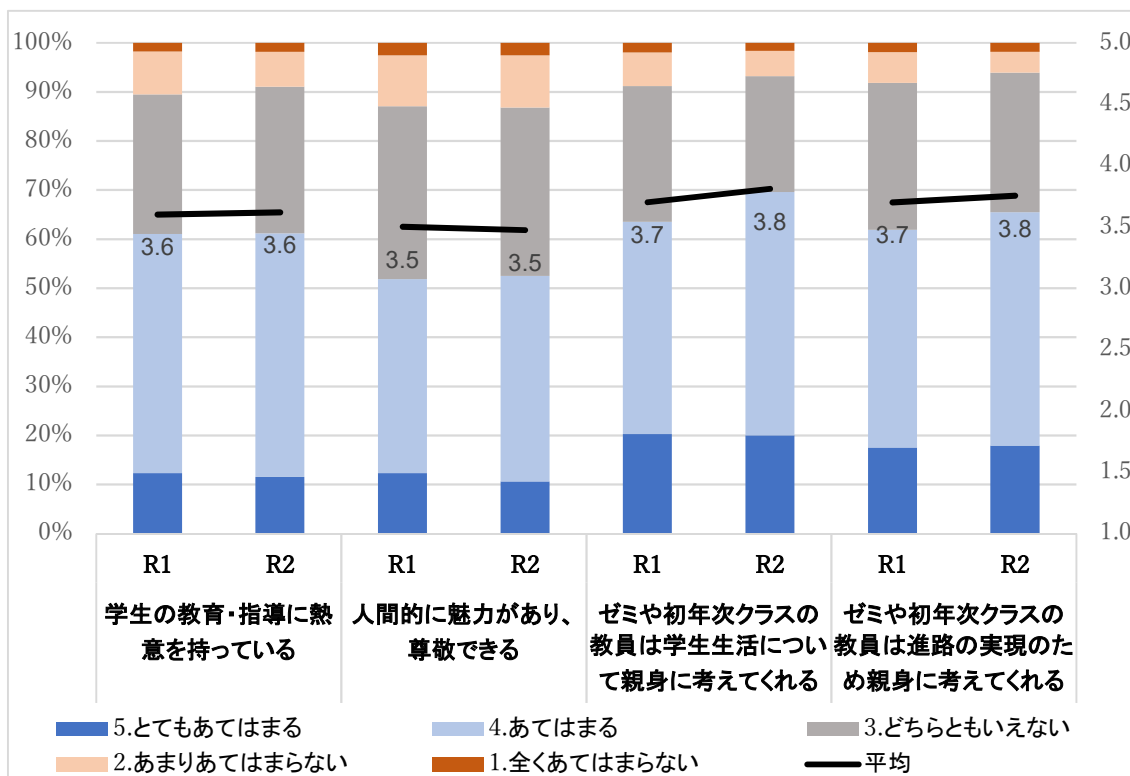
本学の教育・学生生活のサポート体制に対する全般的な満足度(総合的内容)



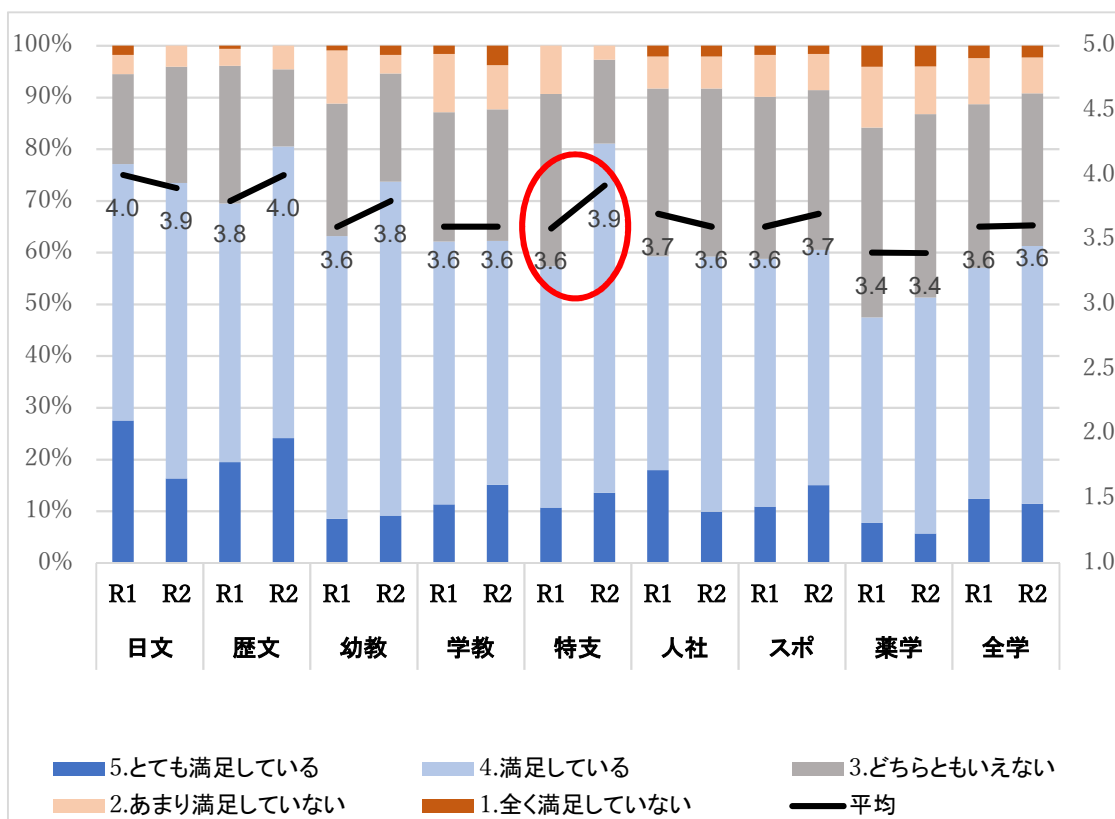
本学の教育・学生生活のサポート体制に対しては、“概ね満足している”と判断される。薬学部の満足群が他学科に比べて少ないことにも大きな変化はない。

一方、学校教育専攻（以下“学教”）ではR1→R2で、満足群-3.3、不満足群+8.8ポイントと、満足度の低下が顕著であった。以下の【IV：教員への満足度】【V：職員への満足度】については大きな増減はないので、現在の支援内容が学生のニーズにマッチしていない可能性がある。面談を増やすなどの方法で、ニーズを汲み上げる努力が求められる。詳細は、学科ごとの満足度調査の結果にゆだねる。

【IV：教員への満足度】

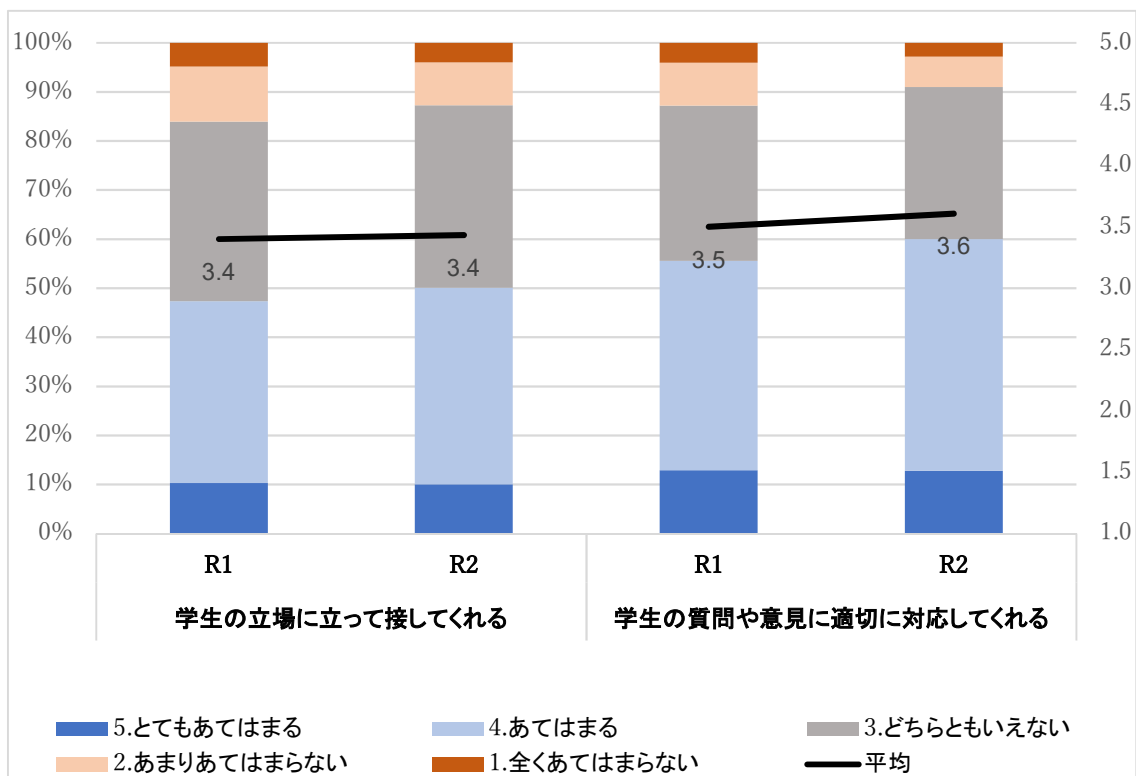


本学の教員に対する全般的な満足度(総合的内容)

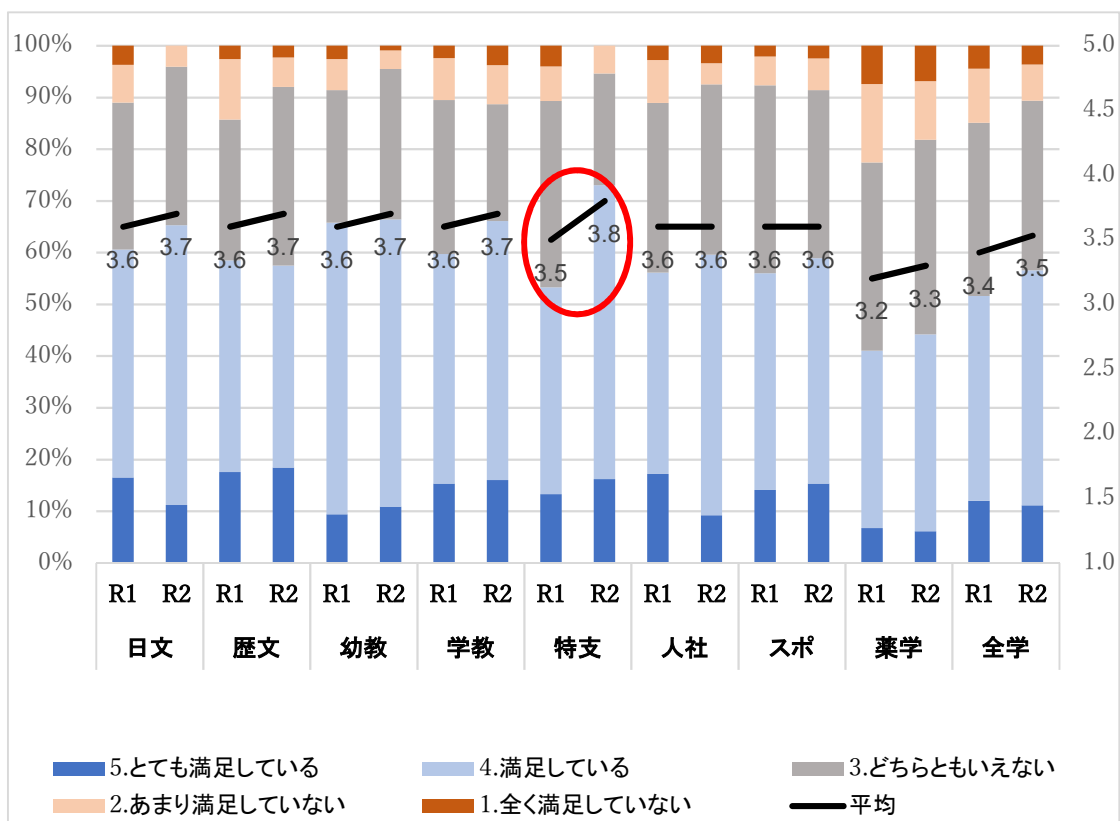


特別支援教育専攻(以下“特支”)は、「本学の教員に対する全般的な満足度」で R1→R2 は 3.6→3.9 と 0.3 ポイント上昇した。ただし、回答者数は R1:75 人、R2:37 人と半減している。よって、専攻全体の教員への満足度を反映しているとは判断しにくい。回答者数が少ない場合には、他の要因の影響を受けやすいため、数値変化の原因を考察するには注意を払う必要がある。全体としては、満足度に大きな変化は見られない。

【V：職員への満足度】



本学の職員に対する全般的な満足度(総合的内容)



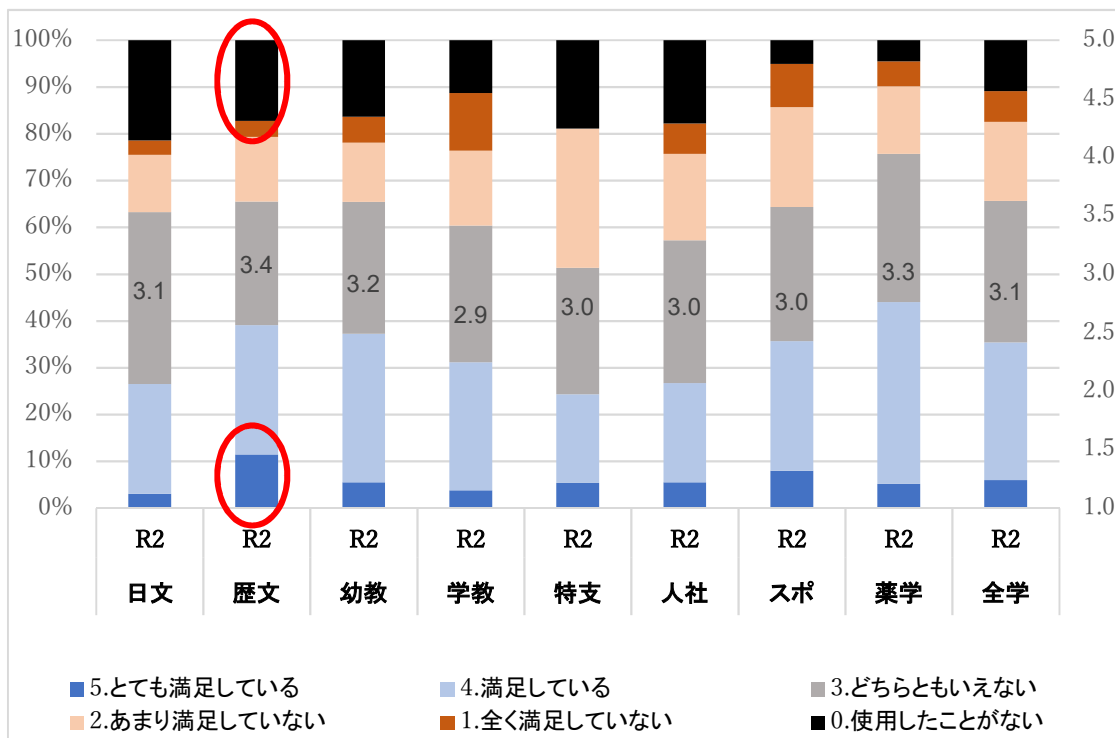
特支は、R1→R2 で 3.5→3.8 と 0.3 ポイント上昇した。これは「本学の教員に対する全般的な満足度(総合的内容)」と同じく回答者数が半減した中での上昇であり、専攻全体の職員への満足度を反映しているとは即断できない。

「学生の立場に立って接してくれる」「学生の質問や意見に適切に対応してくれる」の全学平均値はほぼ同じである。一方、「本学の職員に対する全般的な満足度」で R1→R2 に値が増えたのは 6 学科、横ばいが 2 学科であり、全学でも改善傾向が現れている。これは、職員の学生サービスに対する不断の努力が反映された成果といえる。

【VI：施設・設備への満足度】

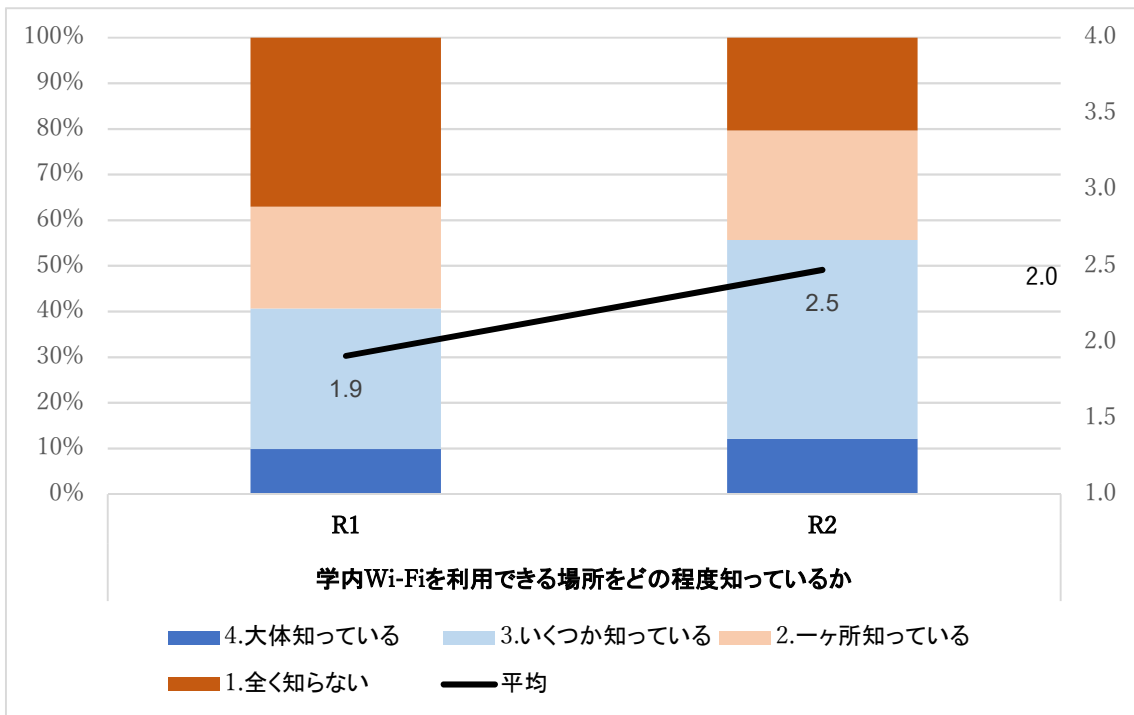
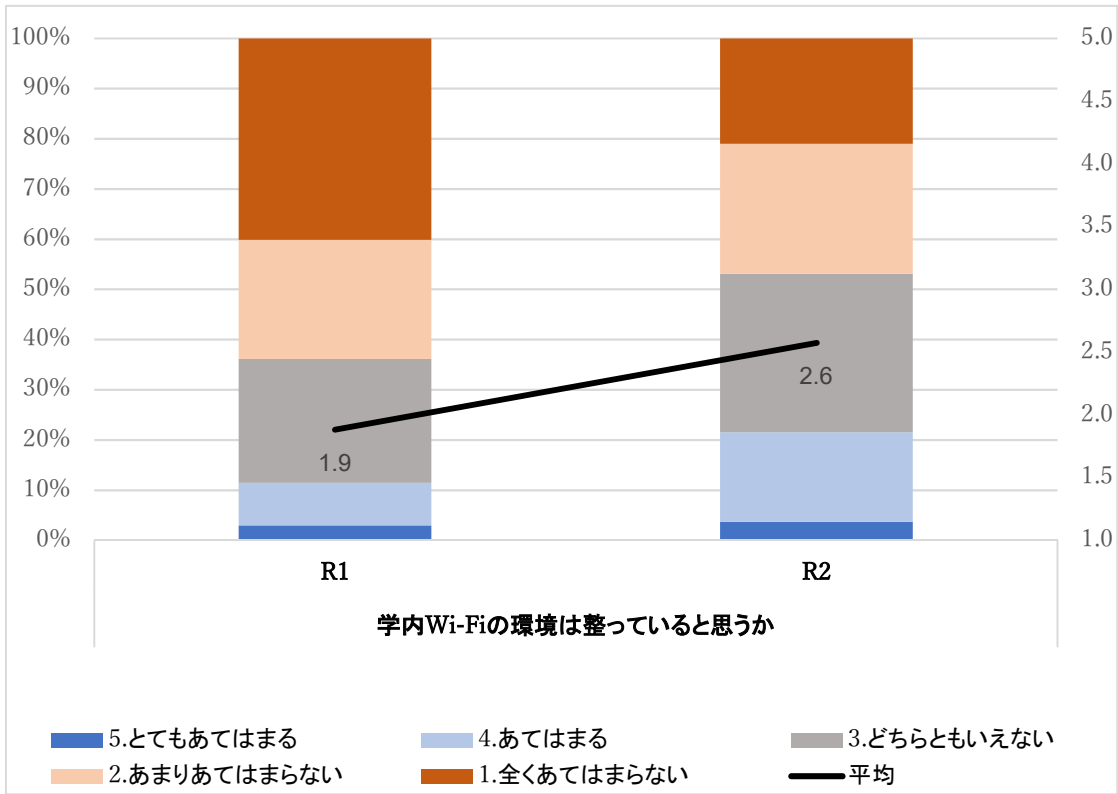
大学内でしか使えない施設や設備*への満足度

* 運動施設や実験機器・実物を用いた教材 など



本項目は本年度初めて導入された。

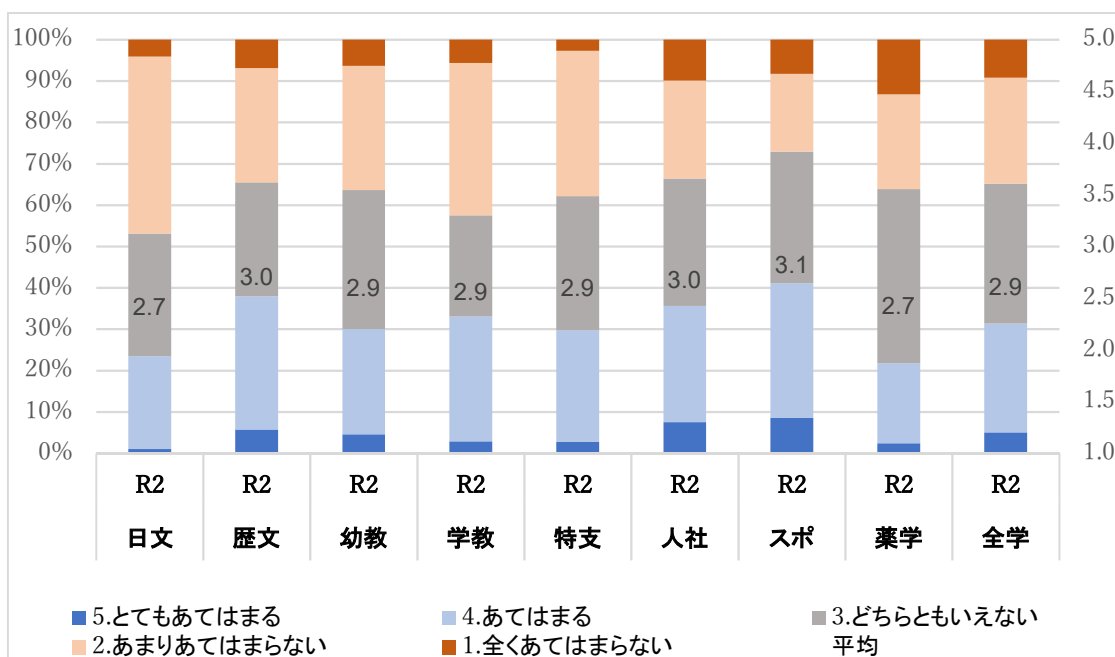
「0.使用したことがない」に着目すると、実技や実験の時間が多いスポや薬学科（以下“薬学”）で数値が低く、日本語日本文学科（以下“日文”）、人社、歴史文化学科（以下“歴文”）などで数値が高くなっていることは理解できる。一方、歴文で「5.とても満足している」割合が高いことには注目すべきであろう。ただし、【IV：教員への満足度】でも言及したが、回答率が72.1%→40.2%と大幅に減っているため、学科全体の傾向を反映しているとは言い難い。コロナ禍の中で、「実物を教材とする」面接授業が実施されたからではないだろうか。具体的には、学科ごとの報告書、あるいは授業の中身を検討することが重要である。



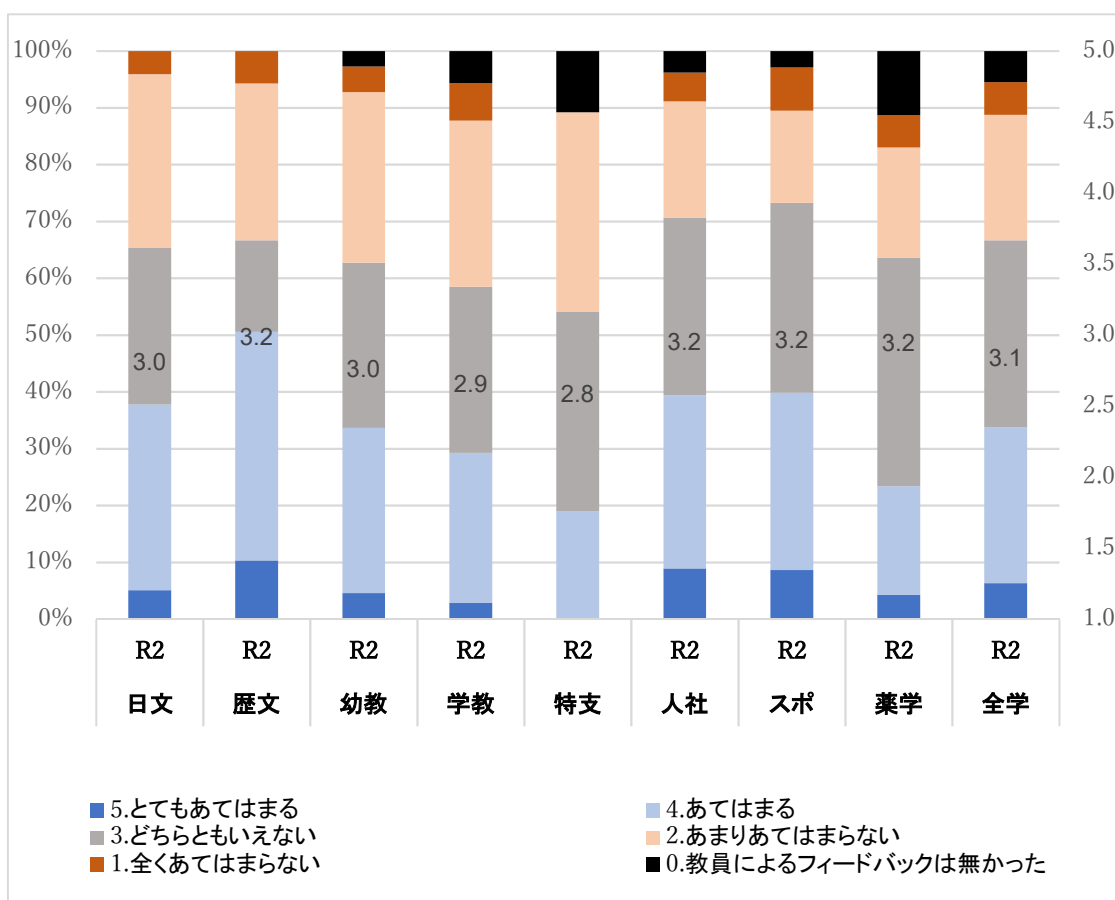
本年度は、コロナ対策として、前期に登学禁止が実施され遠隔授業が一気に広がった。後期も学内で遠隔授業が受けられるようにWiFi設備が増強され、その広報にも注力した。学生もWiFiが必須であると認識し、ニーズが高まったことが、WiFi設備への関心を高めたといえる。十分とはいえないが、学生ニーズに対して環境改善がなされ、大きな成果が上がったと評価できる。

【Ⅶ：遠隔型授業に関する満足度】

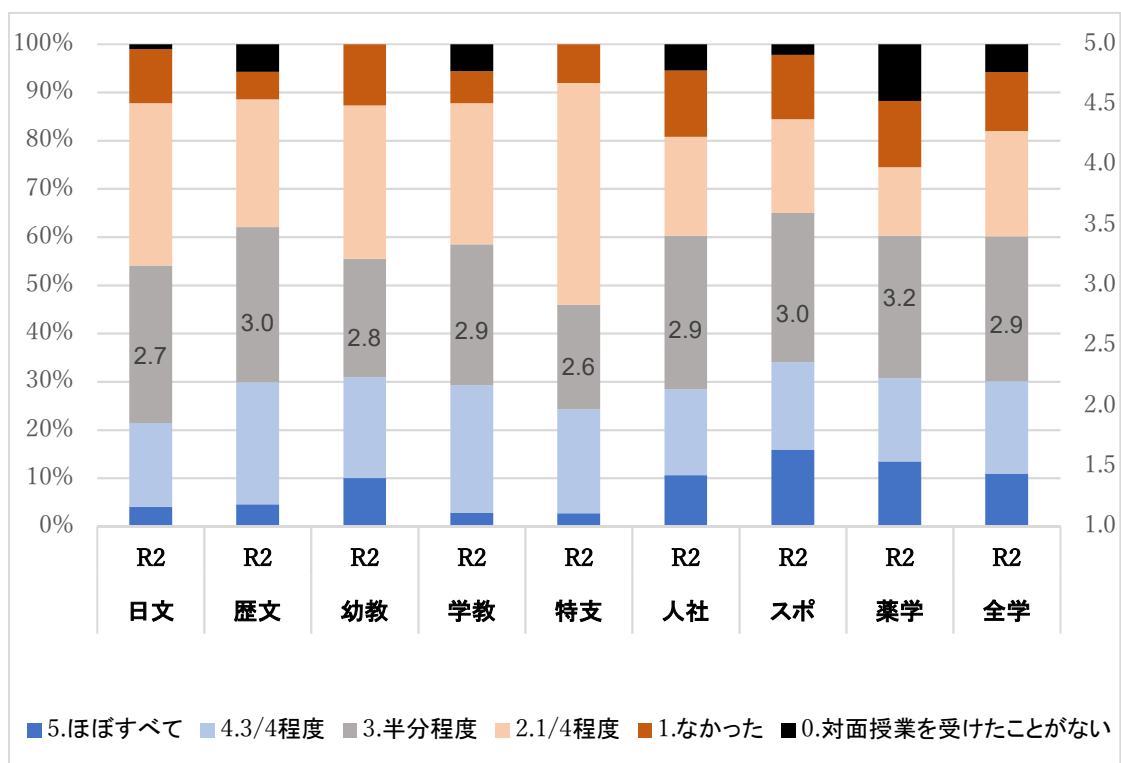
教員とのコミュニケーションがとれた



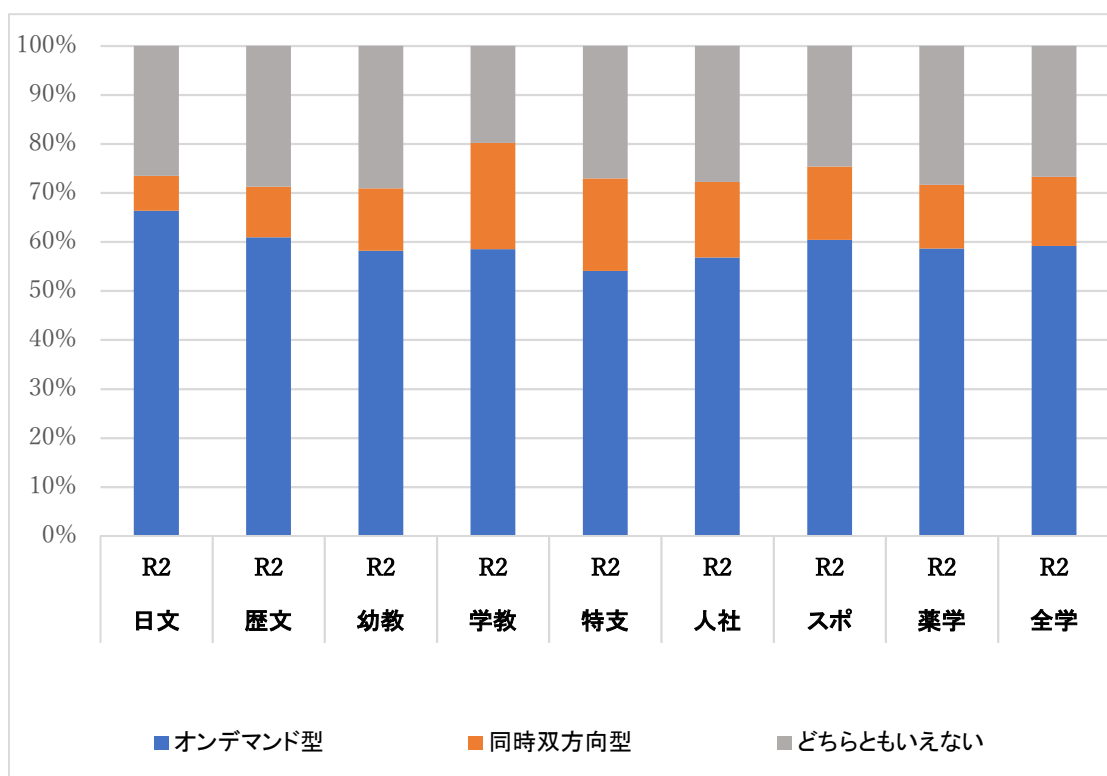
課題等に対するフィードバックに満足した

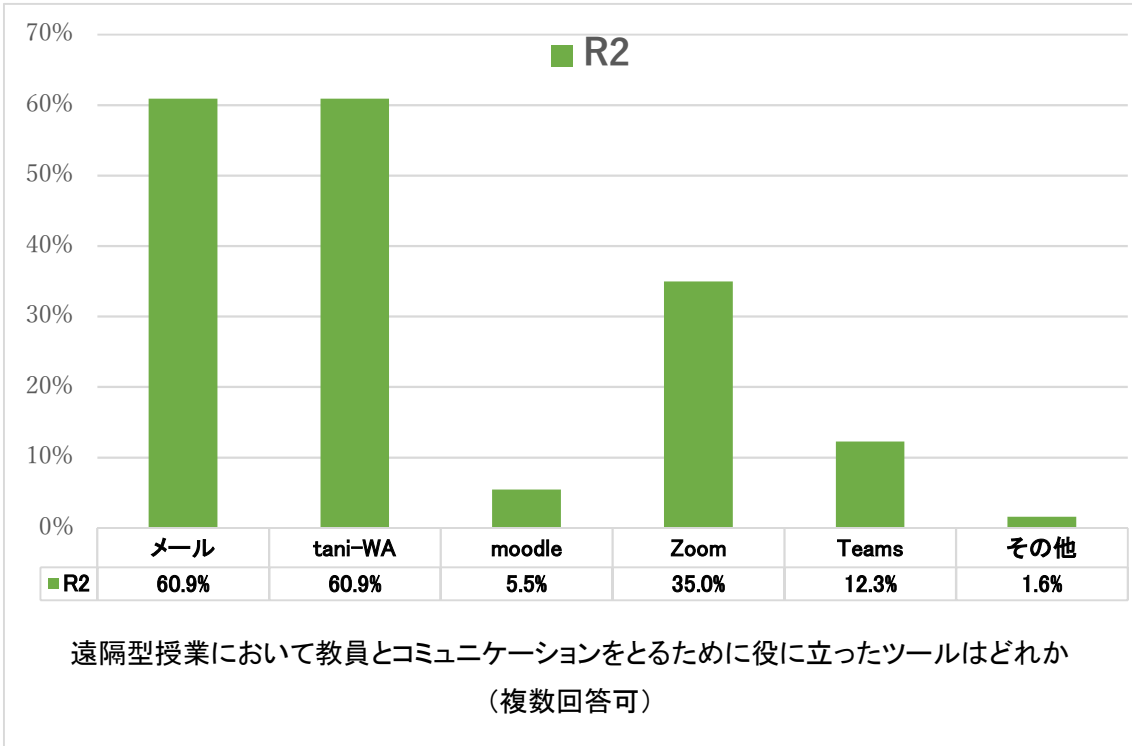


対面授業と同程度の学びができたと思う授業はどの程度あったか

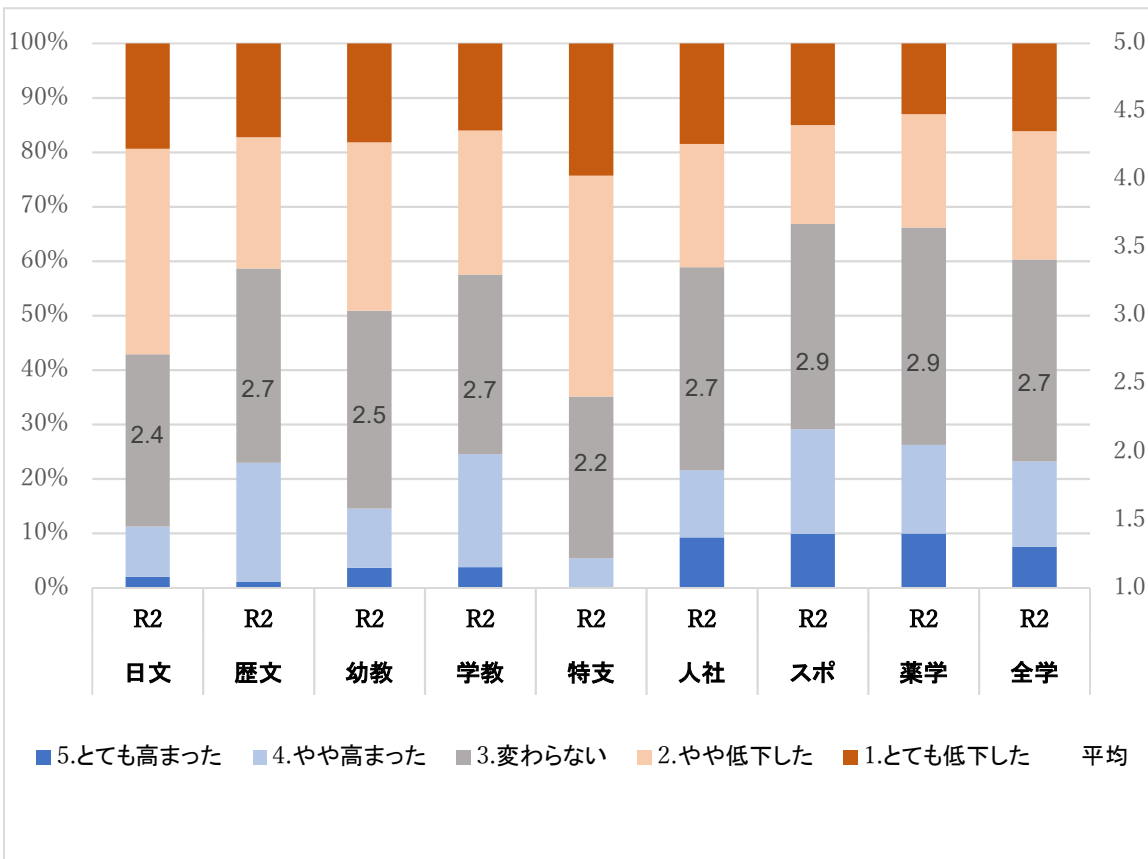


オンデマンド型授業と同時双方向型授業ではどちらが好ましいか





遠隔型授業が続くことによって学習意欲に変化はあったか



本項目は、コロナ対策として、登学禁止と同時に4月末に導入された遠隔授業に対する満足度を複数の観点から訊ねた。オンデマンド方式、TV会議システムを用いた同時双方向方式の2種類で実施された。

最初に、遠隔授業で「教員とのコミュニケーションがとれたか」を聞いた。日文、学教では不満足群が多く、薬学では「1.全くあてはまらない」としたものが他学科に比べ多かった。緊急事態宣言がきっかけでやむをえず導入されたが、やはり「5.とてもあてはまる」と回答したものは少数であった。大学側の準備不足は否めない。一方、これまで補完的な学修手段と位置付けられてきた本学のeラーニングは、「メディアを高度に活用して行う授業」としての設計・検証を経ないで、いきなり本番に活用するといった不十分なものであったにもかかわらず、教員とのコミュニケーションにおける満足群が、いずれの学科でも30%前後であった。このことは、デジタルを活用した教育の高度化への期待が、かなり高いことを裏付けていると考えられる。裏返していえば、「対面授業(面接授業)は、時間とお金をかけ、感染症のリスクを冒しながら大学まで移動をすることの価値が実感できるものでなければならない。」ということでもある。今後、「時と場の共有の価値」が実感できない通学制の大学は、存在価値が低下するであろう。

2つ目に「課題等に対するフィードバックに満足したか」を訊ねた。特支と薬学では、他学科に比べ、「0.教員によるフィードバックは無かった」という回答が多かった。まずは、(1)受講した遠隔授業において教員によるフィードバックがなかった(2)遠隔授業を受講しなかったのいずれであるのかを確認する必要がある。次に、(1)であるなら、当該授業の授業記録を検証し、なぜフィードバックが行われなかったのかを授業担任とともに振り返り、教育方法の見直しを進めなくてはならない。LMSはこうした授業過程を記録する仕組みを有しており、これこそが教育のPDCAを推進するための第一歩である。

3番目に「対面授業と同程度の学びができたと思う授業はどの程度あったか」を訊ねた。薬学では11.8%が「0.対面授業を受けたことがない」を選んでいる。彼らはほぼ全員が5回生であり、実務実習中であったため対面授業を受けていないのは当然である。そのうち前の「課題等に対するフィードバックに満足したか」の問いで「0.教員によるフィードバックは無かった」と回答したものは14%(内数)であった。学外で学ばざるを得ない状態であった5回生の遠隔授業受講者にとって、教員からのフィードバックがないというのは、登学して希望すれば質問の機会が得られる学生に比べ、不満足感が大きいのではないだろうか。これは薬学に限ったことではなく、学外で長期間実習をする学生にとっては切実な問題であろう。一方で、履修期間中に長期の学外実習を余儀なくされる学生への対応は、教育実習等を抱える本学では以前から指摘されており、コロナ禍だけの問題ではない。実習期間が対面授業と重なるのであれば、夏季休暇中や春休みに遠隔授業を開講し、対面授業と同程度の学びができるようにするといった4学期制の導入も急がれる。

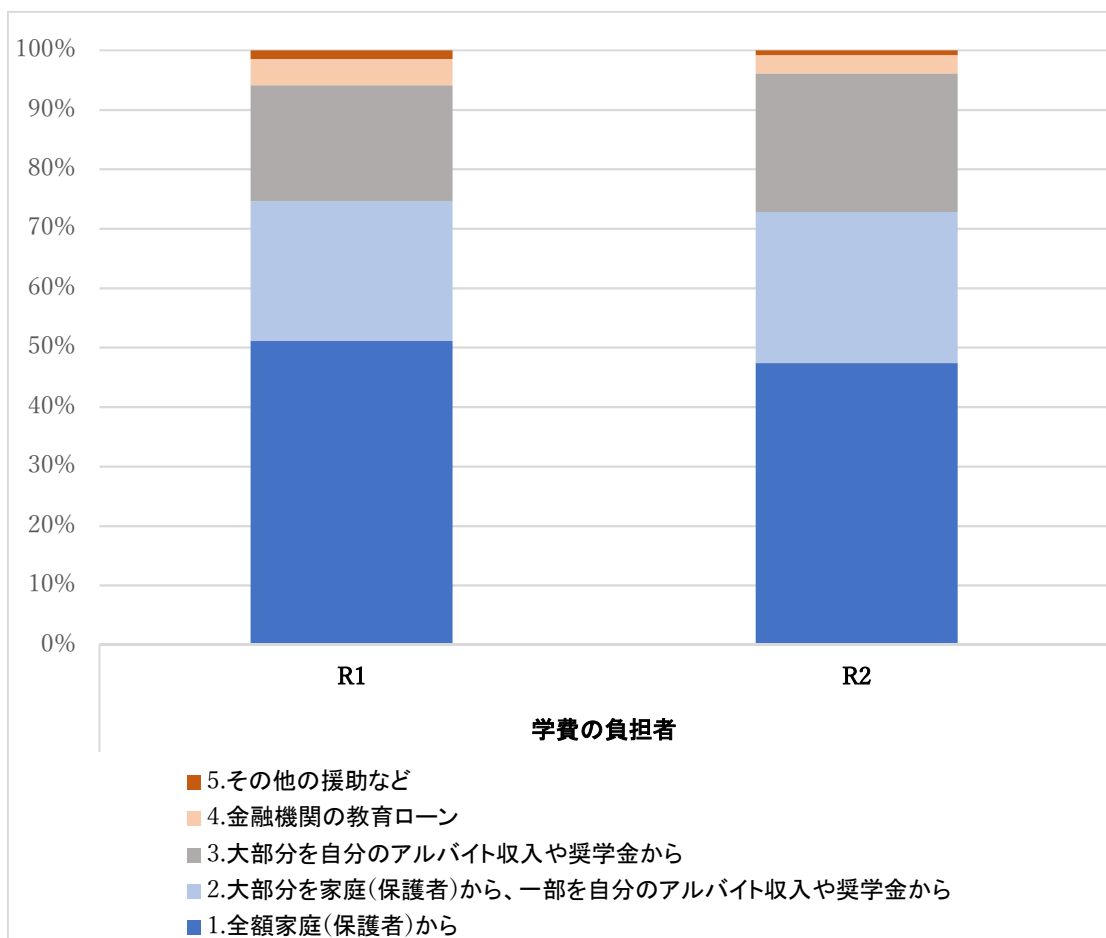
最初の問いにおいても言及したように、十分な準備ができないまま開始した本年度の遠隔授業であったが、対面授業と同程度の学びができたと評価した授業が「5.ほぼすべて」と「4.3/4程度」であったとする学生が、いずれの学科でも3割前後に達した。遠隔授業に対する教職員の必死の努力

が反映されたとプラスに評価できる反面、今後、対面授業の更なる改善がなければ、登学して学ぶことの意義が見いだせない恐れが示されていることを肝に銘じておきたい。

4 番、5 番では遠隔授業の方式とそのツールについて聞いた。TV 会議ツールを用いた同時双方向型は支持者が少ない。やはり、学修時間、課題への取り組みにおいて自由度が高い LMS によるオンデマンド型授業が望まれている。

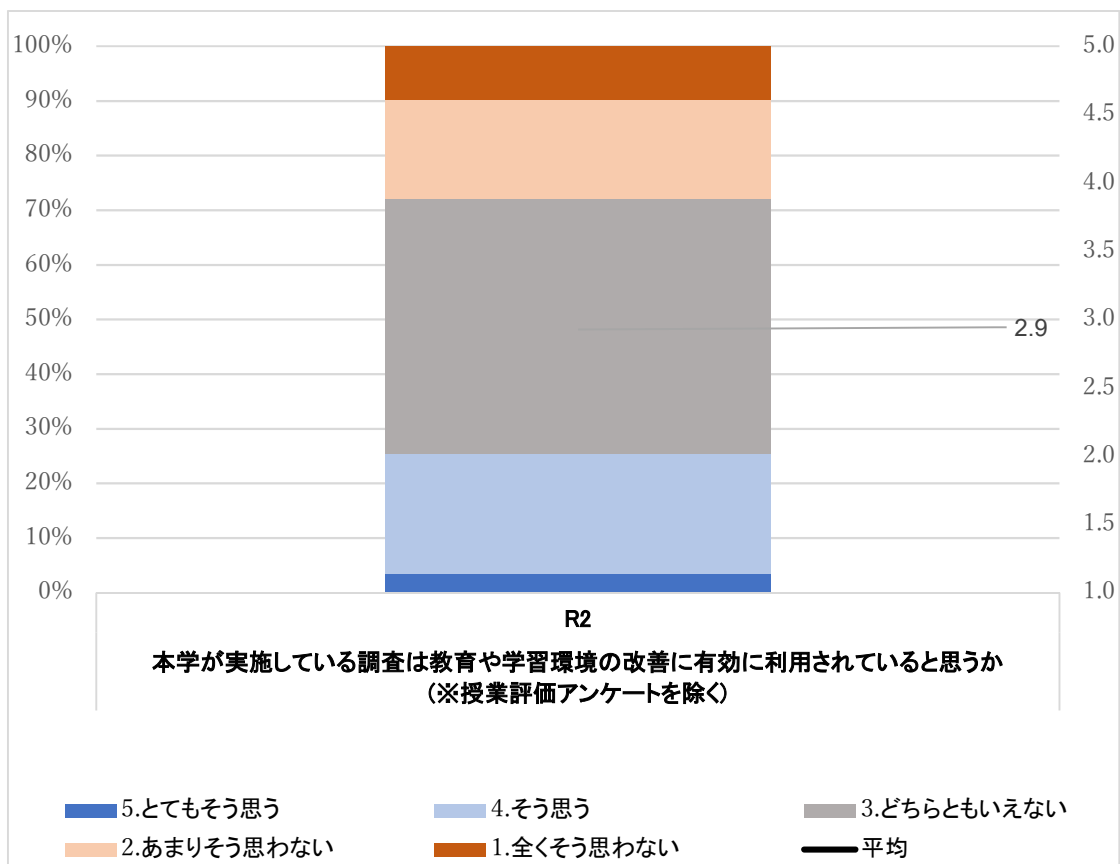
6 番の「遠隔型授業が続くことによって学習意欲に変化はあったか」との問いに、人社、スポ、薬学では 20～30%近くが「5.とても高まった」「4.やや高まった」と回答した。この結果には、遠隔型授業の長所が過大に評価されているのではないかという懸念がある。対面授業にはない目新しさに注目が集まった結果であり、それぞれの方式の特徴が理解・納得され、ブレンド型(対面+eラーニング)へ移行していく過程であると考えれば、大学教育の選択肢が広がったという点でプラス評価ができる。一方、複数の学科で不満足群が 4 割を超えている。これは、本年度の遠隔型授業を反省し、ブレンド型授業におけるeラーニングの長所をブラッシュアップすることを求めているのだと解釈した。

【Ⅷ：学費の負担者及び学費への意見・提案】



R1→R2 で大きな変化は見られない。学費の負担者は、「1.全額家庭(保護者)から」と「2.大部分を家庭(保護者)から、一部を自分のアルバイト収入や奨学金から」を併せると74.8%であった。本年度はコロナ禍により飲食店でのアルバイト雇用が激減し、多くの学生がダメージを受けている。そうした報道を前提にすると、前年度に比べて学費負担者を「3.大部分を自分のアルバイト収入や奨学金から」とする割合が減っているのではないかと思われたが、ほとんど変化はみられない。学生課で扱っている各種奨学金申請数の増減と関連付けながら検討する必要がある。

【区：本学が実施している各種調査への満足度】



「1.全くそう思わない」「2.あまりそう思わない」という否定的見方をする学生が、27.7%。「3.どちらともいえない」と回答した学生は46.2%もあり、これらを併せると70%を超える。例えば、WiFiの環境改善(p.13)では、学生に改善されたことが伝わっているという結果が現れた。本問に対する学生の回答について真摯に反省するとともに、毎年、最低1項目の改善点を学生・社会に向けて発信していく広報努力が求められる。この点は、大学としてぜひ前向きに取り組みたい。

[2. 総合考察]

【基本的分析】 全学の回答率は、昨年度に比べかなり低くなった。一方で、学科(専攻)間の回答率に大きな差が出た。特に、人社とスポでは、それぞれ 0.6, 8.5 ポイント上昇した。IR 委員からは、回答率向上のための取り組みとして、「ゼミ単位で学生の回答状況をお知らせし、その際には、学生の氏名も公開している。」という工夫が紹介された。未回答者の情報を学科内で共有し、最も信頼するゼミ担任が個別に声掛けすることが、学生の行動変容に有効であると考えられる。

【本学への満足度】 満足群の割合は R1:61.3%、R2:61.6%であり変化はない。一方、1回生は新入生アンケートの満足度への設問で「5.満足している」(24.4%)が「5.とてもあてはまる」(13.6%)に減った。1回生は、本調査で1ランク評価を下げたことが窺える。さらに、新入時に 652 名であった回答者が、405 名に減った。新入時点での“期待を込めたプラス評価”が、学生満足度調査では、現実的な評価に移っていることが確認された。今後は、2つの調査を学生に紐づけて、満足度が大きく下がる学生に対する低下要因の調査・学生支援を検討したい。

【大学生生活のサポート体制への満足度】 学教で、満足群-3.3、不満足群+8.8 ポイントと、満足度の低下が顕著であった。**【教員への満足度】****【職員への満足度】**については大きな増減はないので、現在のサポートが学生のニーズにマッチしていない可能性がある。面談を増やすなどの方法で、ニーズを汲み上げる努力が求められている。

【教員への満足度】**【職員への満足度】** 特支では 0.3 ポイント上昇した。しかし、これは回答者数が 75→37 人と半減したことによる割合の変化であり、専攻全体の傾向を示しているとは判断しにくい。一方、「本学の職員に対する全般的な満足度」で値が増えたのは 6 学科、横ばいが 2 学科であり、全学でも改善傾向が現れた。これは、職員の学生サービスに対する不断の努力が反映された成果といえる。

【施設・設備への満足度】 学習環境のデジタル化推進のため、WiFi 設備が増強されその広報にも注力した。それが、学生の WiFi 設備への関心を高めたといえる。十分とはいえないが、大きな成果が上がったと評価できる。

【遠隔型授業に関する満足度】 「教員とのコミュニケーションがとれたか」の設問では、「5.とてもあてはまる」と回答したものは少数であった。一方、準備不足であったにもかかわらず、満足群は約 30%もあった。遠隔でも教員とのコミュニケーションがとれるという評価は、逆に見れば「登学して受ける対面授業は、リアルキャンパスのよさが実感できるものであるべき」ということでもある。次に「課題等に対するフィードバックに満足したか」を訊ねた。特支と薬学では、「0. 教員によるフィードバックは無

かった」という回答が多かった。まずは、(1)受講した遠隔授業においてフィードバックがなかった (2) 遠隔授業を受講しなかった のいずれかを確認し、(1)であるなら、当該授業の授業記録から、なぜフィードバックが行われなかったのかを授業担任とともに検証し、教育方法の見直しを進めなくてはならない。LMS には授業経過が記録されているので、そのデータを活かすことが教育 PDCA の第一歩と考える。3 番目に「対面授業と同程度の学びができたと思う授業はどの程度あったか」を訊ねた。薬学では 11.8% が「0.対面授業を受けたことがない」を選んだ。彼らは全員が実務実習中で対面授業を受けていない。そのうち「課題等に対するフィードバックに満足したか」の問いで「0. 教員によるフィードバックは無かった」と回答したものは 14%であった。履修期間中に長期の学外実習を履修する学生への対応は、教育実習等に関連して以前から指摘されてきた。実習が対面授業と重なるのであれば、夏季休暇や春休みに遠隔授業を開講し、対面授業と同程度の学びができるようにするといった対応も急がれる。6 番の「遠隔型授業が続くことによって学習意欲に変化はあったか」との問いに、人社、スポ、薬学では 20～30%近くが「5.とても高まった」「4.やや高まった」と回答した。対面授業にはない目新しさに注目が集まった結果とも考えられ、ブレンド型へ移行していく過程だとみれば、教育方法の選択肢が広がったと評価できる。一方、複数の学科で不満足群が 4 割を超えている。これは、本年度の遠隔型授業を反省し、ブレンド型授業におけるeラーニングの長所をブラッシュアップすることを求めているのだと解釈した。

【本学が実施している各種調査への満足度】 「有効利用されているか」の問いに、「1.全くそう思わない」「2.あまりそう思わない」という否定的見方をする学生が 27.7%。「3.どちらともいえない」は 46.2%もあり、併せると 70%を超えた。例えば、本年度の WiFi の環境改善では、学生にそれが伝わっているという結果が現れている。この結果を真摯に受け止め、毎年 1 項目の改善点を学生・社会に向けて発信する広報努力が求められる。大学としてぜひこれに取り組みたい。

以上